廣讃寺ジャーナル

第 57 号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
携帯 090-1568-4623
〈E-mail〉
matsuoka@kosanji.or.jp

満中陰法要を勤めて

九月二十九日からちょうど四十九日にあたる十一月十六日に前坊守の満中陰法要をつとめました。

亡くなった当時はまだ少し暑いくらいの気温でしたが、すっかり寒くなりました。

亡くなってからは時がたつのは早く、いつの間にか満中陰法要を勤めているような感じがしました。ただただ、いたずらに時を過ごしてきたような気がしてなりません。

亡き人を偲びつつ如来のみおしえに遇いたてまつる

あてにならない自分をたよりにし、決して仏におまかせできない私の姿が見えました。

前坊守の法要の次は、親鸞聖人の法事、報恩講です。一生なんてすぐに終わってしまいます。あとから人生を振り返ってみて、結局は何のために生きてきたかわからない、ということにならぬように、心を新たに聞法していこうと思います。

三河三カ寺を訪ねて

（一向一揆探訪）

秋田宗和

九月二十七日、観光バスで三河三カ寺と妙源寺を訪ねた。三カ寺とは三河一向一揆の拠点となったお寺のことである。

三河一向一揆は本願寺門徒による松平家（徳川家）との抗争で『一向』とは、後の徳川幕府から『真宗』呼称を禁止され、徳川が好んだ浄土宗、すなわち一向宗にちなみ呼称させられたとのこと。松平家臣を真宗門徒派、松平派に分断しての戦は、松平家にとっては地域の覇権をかけた戦であった。

最初に訪れた本證寺は寺の境内を堀で囲い土塁を築いたお城のような構えであり、今まで抱いていた真宗寺院のイメージとは大いに異なるものであった。

専修念仏の精神を思うと複雑な思いにかられると同時に、半面、真宗勢力がそれに対抗するほどに普及したすごさに改めて驚愕（きょうがく）した。

浄専寺は蓮如上人が三河一帯に専修念仏の教えを普及させるため、この地を訪ねられたときのゆかりの寺であり、勝鬘寺や上宮寺は共に一揆側の拠点となった寺である。妙源寺は説明書によれば親鸞聖人の教化により、ときの領主、安藤薩摩守信平が武門を捨てて創建した寺で、一揆では家康がこの寺に難を逃れた経緯があるという。以来、松平家とは親しい関係が続き、後に家康から『源』の一字を賜り、妙源寺と改めた。三河では最も古い真宗道場とのこと。

真宗がその地の領主以上に寄進を集める力を持ったことを思い、また本證寺の堀や土塁を目の当たりにして、一揆が家康方に敗れたものの、その教義が今日まで脈々と受け継がれていることを思うと、教団の教えが紛れもない真理であるのだろうと強く感じた。同時にこれからも真宗ゆかりの地を訪ね、真宗の歴史に触れたいという思いを強くしたものである。

合掌

向こう三軒両隣（秋の彼岸の説教より）

村上三智雄

秋の彼岸のお中日、廣瀬純史師のお説教を聞く。

師より、今回の説教のお題はこれといって示されなかったので、説教全体を聞いて、私なりに表現させてもらうと、ことわざの「遠き親戚より近き隣」と自分なりに表題にしました。

遠い親戚は次第に疎遠になっていきますから隣近所との付き合いをいつまでも大切にせよということ。師の説教の中心はこれだと思いました。

ＮＨＫの朝のドラマ、梅ちゃん先生の視聴率がよいという。きっと年配の方は昭和三十年代のころを思い出してノスタルジア(郷愁)を、若い人は家庭での会話による心のうるおいを感じる。それが高視聴率の理由ではないでしょうか。

郷は象形文字からすると、食卓を囲んで食事をとることから考えられたと教えられる。家族生活もそのようになっていればよいのですが、物が多く豊かな生活になったおかげで逆に家族がバラバラの生活をし、さながら共同下宿人化しているのではないか。会話も少なく年配者の居場所がなくなっている。

年配者からしてみれば、こんなはずではなかったと思っても現実だからしようがない。戦後の苦労、努力はなんだったのかと反省しても仕方ない。心の安心（あんじん）・安楽を求めて動き出すことです。それは志願成就の心だといわれた。幸せ、人間存在の根っこにあるものを求めて、少し今の生活を振り返ろう。

違った生活空間に勇気をもって出てみよう。旅行もよい、趣味を変えるのもよし。

自分だけの幸せを考えた行動は必ず行き詰るから、人のつながり（いやな部分もあるが）の中で生かされている新しい自分を発見してくださいと諭された。

利己的（自己中心）になっている自分の生活を反省するよい機会となりました。南無阿弥陀仏。ありがとうございました。

同朋新聞　11月号　P9に
佐久間さんのお便りが掲載されました。

読者のお便り

前住職の一周忌を迎え

名古屋教区廣讃寺門徒　佐久間　政子（68）

今は、ただのんべんだらりとは言わないが、変わりなく日々暮らしています。そんな私でも主人が病に倒れ、後遺症がのこり、あれから7年になります。そのころを思いかえしても、どうやって日々過ごしたのか…。商売もやめて、3、4年間を主人とどうやって暮らしていたのか…。みんな止まっていました。

そんな時、子ども、兄妹、親戚、友だち、近所の人、そしてお手次の前住職が心を寄せていただき、見守ってくださいました。それなのに私たち夫婦は、世界一の悲劇のヒロインで闇の中でした。

ある日、「聞こえた。聞かせて。聞く。聞いたよ。聞かせたかった。聞いてあげる。聞きなさい」と私の耳に入ってきました。「聞く」の一言でもこんなに多く言葉があります。すごいですね。

背中の重荷を降ろさなければと思っていたそんなころ、お寺の鐘、お勤めの声が聞こえてきました。それは、くるくる回り私の心に、体全体にいきわたり、響いてきました。

そんな時、「なむあみだぶつ」と声にし、顔が上がる時をいただけばいい。ただ腰を下ろしてお念仏を聞く、そんな「聞く」縁をいただけばいい。私は私のままでいい。そう思わせていただき、私は主人のかたわらにいてもいいのだと感じました。

このようなことを書こうと思ったのも前住職から「話は最後まで聞きなさい。見えてくるものがあるよ」と常日頃いろんなお話をしていただいたからです。その前住職も一周忌を迎えられました。この手紙が、私なりの前住職の法要です。

合掌

行事予定

十一月三十日（金）～十二月二日（日）
報恩講執行

十二月　八日（土）七時半 同朋委員会・例会
（役員は七時）
十九日（水）二時～四時　学習会
二十八日（金）十時　二十八日講・女人講
三十一日（月）三時　歳末勤行
十一時半～十二時半まで 除夜

一　月　一日（祝）十時　修正会
十二日（土）七時半 同朋委員会・例会
（役員は七時）
十九日（土）二時～四時　学習会
二十八日（月）十時　二十八日講・女人講